



こころの古代生活誌

古橋信孝

編

河出書房新社

ことばの古代生活誌

古橋信孝 編

一九八九年一月五日 初版印刷
一九八九年一月一〇日 初版発行

河出書房新社

発行者 清水 勝

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二
TEL (四〇四) 一一〇一(営業)
(四〇四) 八六一一(編集)
振替(東京) 〇―一〇八〇二

印刷 東洋印刷株式会社
製本 加藤製本株式会社

装幀 戸田ツトム

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯に表示してあります

©1988 Printed in Japan
ISBN4-309-00536-5

はじめに

古代の文献を読むのには、古代の宇宙観を解していなければならない。これは当り前のことでありながら、なかなか難しい。古代の宇宙観を知るには、古代の文献を読まねばならないからだ。つまり循環してしまう。そこで民俗学や人類学が応用されることになる。しかし民俗学や人類学の書物も、近代の側の者が観察し、整理して書かれたものだから、読み方が難しい。結局こちらが何を読むかにかかってくる。こちらを徹底的に相対化するつもりで読まないで、こちらの感性にひっかかってくるものだけを、安易に掬い上げることになりかねない。自分の生きている時代を相対化し、古代も含めて、異なる社会を異和として受感する感性が重要に思えてくる。

古代の文献は、ことばの意味は普遍的であるという暗黙の了解を根拠にして読まれてきた。その了解は、人間はたいして変わらないという認識によっている。たとえば走る、食べる、思うなど、人間の基本的な動作は変わらないというように。しかし古代では、走るは、なにかに迫られて激しく必死に動くことで、いわば靈威の發揮されている状態だし、食べるは、靈威あるものを体内に入れて自己の魂を活性化する行為であり、思うは、現実に見えないものを見ることのできる不可思議な行為だっ

た。それを、その特殊性を剝いで、どこにでも通じる動作の面、つまり普遍的な相の意味だけ取り出してみているのが、近代の読み方なのである。だからいくら古代を呪的な世界として見ているつもりでも、具体的な場面になると、近代の当て嵌めをしてしまう。つまり普遍性からかんがえるのは、近代の個別的な見方なのである。

世界観は具体的な生活のあらゆる場面に及んでいると見たほうがいい。生活の仕方はすべて神がみから教えられたものだった。神がみを根拠にして、生活は成り立っていた。着物を着るのは寒いからではない。そうであるならば暑いときは着ないはずなのに、着ている。着なければならぬから着るのだ。つまり着物を着ることは、神の装いだった。食べるのに箸を使うのは、おそらく呪力ある食物に直接触れてはならないからだ。箸はハシで、橋と通じているはずである。異郷と繋げるものが橋だから、箸も異郷のものとしての食べ物や口に運ぶものだった。

そういうように、古代の文献はいったん神話的に読まれねばならない。つまり古代の宇宙観に従った受け取り方をしてみなければならぬ。宇宙観は観念的、抽象的なものではなく、生活を支えている原理だからである。もちろんすべてがそういう発想でかんがえられるわけではなく、またわれわれとあまり違和ない感じ方、考え方をしている場合もある。それにこちらがようやく思い描いた古代像も、近代にどっぷり浸かって生活せざるをえないわれわれには、絶対的に誤っていないとはいえない。したがって繰り返し検証し続けていかねばならないだろう。

本書はそういう観点から、古代の宇宙観を素描してみようという意図で編まれたものである。この種のタイトルの書物は多く見られるが、ほとんどのものが始めに批判した通りの誤りを犯している。

資料に厳密にといわれるが、古代のことばに対する把握・感性、読み方の基本も問わないで厳密もないものだと思う。その意味では粗雑といわれかねない部分もあるだろう。しかしそのような批判を超えるものを本書はもっているはずである。古代の側に徹して見てみようという姿勢は貫いたつもりだからである。それゆえ同じことの繰り返しに見える部分が多いかもしれないし、そういう部分に辟易されるかもしれない。しかしいったんは徹底的にこの種の見方をしてみなければならぬのだ。その意味では本書は、古代を、古代の生活を明らかにしようという試みの一段階にすぎないかもしれない。だからいくらでも疑問や批判を提出していただきたいと願っている。この種の試みによってしか古代の生活は見えてこないように思える。それほど古代は遠い世界であり、異質な世界なのである。

古橋信孝

目次

はじめに

第一部 時空篇

序章 古代の宇宙観（古橋信孝）

13

1 共同体と異郷

13

2 古代の空間

18

3 時間観

23

第一章 人を囲む空間

29

第一節 村・里・国（古橋信孝）

29

1 村と里

30

2 国

34

3 都

38

第二節 村の外の世界（古橋信孝）

39

1 原

39

2 野

40

3 川

43

4 山 46
5 海・湖 51

第三節 異郷との交通（古橋信孝） 55

1 道 55

2 市 61

第四節 家の内と外（久原清治） 66

1 家 66

2 垣 67

3 門 70

4 庭 73

5 屋 77

第二章 人生をめぐる時間 83

第一節 人の一生（古橋信孝） 83

1 誕生 84

2 子供 86

3 大人 89

4 老人 92

5 死 95

第二節 一年（多田一臣） 100

1 春夏秋冬 100

2 神來臨の時期 105

3 曆法の導入と季節観 112

4 満ち欠ける月 114

第三節 一日（近藤信義） 115

1 朝昼夕夜 116

2 古代人の一日 122

第二部 生活篇

第一章 信仰生活 135

1 神と仏（古橋信孝） 135

2 社（山口 暁） 138

3 巫覡（山口 暁） 141

4 呪術（久原清治） 144

5 仏教（久原清治） 149

第二章 生産・労働・交易（三浦佑之） 154

1 稲作 154

2 畑作・採集・開墾 161

3	漁撈	163
4	狩猟	166
5	商い	169
第三章 家の生活（古橋信孝）		
1	食生活	171
2	衣服	177
3	化粧・装身具	182
4	睡眠・寝具	185
第四章 恋愛と結婚（森朝男）		
1	出逢いと求愛	189
2	恋の期間	195
3	結婚およびその後	199
第五章 旅（野田浩子）		
1	旅のさまざま	207
2	交通手段	211
3	宿	214
4	旅の装束	216
5	旅の儀礼	216

第六章

遊びの時間

222

1

語り（柿崎伸夫）

222

2

歌（柿崎伸夫）

225

3

音楽（山口 暁）

228

4

遊び（山口 暁）

233

5

勝負事（石井 貢）

236

第七章

災いと法（古橋信孝）

240

1

病いと災い

240

2

犯罪

245

3

裁判・刑罰

249

4

規範・法

251

索引

執筆者紹介

ことばの古代生活誌

第一部

時空篇

序章 古代の宇宙観

1 共同体と異郷

古代の宇宙観を知るには、村の始まりからかんがえるのがいい。それは社会の始まりだからである。つまり社会の始まり以前は人間は存在しなかったのだから、宇宙観もなかった。しかし社会の始まりといっても、狩猟採集社会から農耕社会へというようにわからないいわゆる歴史とは異なったところからかんがえていかねばならない。古代という言い方自体を曖昧にしたままで始めることになる。村の始まりという言い方をしたのはそれゆえである。野に村が立てられたその始まりから古代といっている。

村立て 村の概念や村立て自体についても、第一部第一章で述べるが、ここでは古代の宇宙観をかかんがえていく出発点として村立てを置くのである。村が立てられた始まりは、始祖がどこからやって来て、その土地を選んだことを意味する。そこは選ばれた最高にすばらしい土地である。その意味で、その土地は里（サは靈威溢れる状態をあらわし、トは場所を示す）と呼ばれる（第一章参照）。そして

始祖は初めての人であると同時に、村を立てたのだから、神である。したがってその始祖がかつていた場所は、神の世である。しかしなぜ始祖は神の世を去って、この土地に村を立てたのだろうか。その説明は多様にありうるが、どの説明も、神と人との区別を前提としている。なぜなら現在村を営んでいる人びとは神ではないからだ。

なぜ人は神を幻想するのだろうか。それは、人は社会をなさねば生きていけないし、また子孫を残して存続していくことができるにもかかわらず、個体はやはり一人ひとり別の存在であるから、人が社会をなしているなかにさまざまの矛盾を抱えざるをえないからだ。その矛盾を克服するために、神という絶対的なものを共同体は幻想し、そこに社会の根拠を托し、個体が従わねばならない状態を作り上げるのである。その意味で、村立ての神話で前提としなければならないのは、現在村落を営んでいる側からの幻想だということだ。神話は現在の秩序を始源に帰って説明するものなのである。

始祖が村立てしたということは、自分たちの村は遠い神の世に根拠をもっていることを示している。それは自分たちが普通行きえない世界だ。つまり神の世と村とは断絶をもっている。自分たちの村は神に選ばれた最高の場所にあり、自分たちは神の子孫であるにもかかわらず、村は飢えに苦しめられることもあるし、人は争うこともあり、いつも幸せであることはできない。この矛盾が始祖の世との距離として表現されるのである。村は異郷に取り囲まれており、その彼方に始祖の神の世があると幻想する。

その異郷とは、ある意味で始祖の神に選ばれなかった世界だ。だから恐ろしい世界だった。危険な場所で、めったに人が入ってはいけなかった。したがって里の空間と異郷とははっきり区別された。